

運動有能感を高めるための体育授業の実践

～児童による適切なめあて設定と課題を解決するための手立てを通して～

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻
学籍番号 18AX006 篠原 千優

1. はじめに

小学校学習指導要領(平成29年度告示)体育編では、生涯にわたって豊かなスポーツライフの実現を目指すために、運動の楽しさや喜びを味わい、課題解決に向けた学習を通して資質・能力を育成することを指摘している。また、子どもたちが運動・スポーツに対して「する、みる、支える、知る」という多様な関わり方が求められているが、全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果(2018)から、体育の授業を楽しいと感じる要因の1つとして、「できないことができるようになった」という経験が挙げられている。そのため、「する」活動に特に重点をあてて、さらに体育授業の充実を図り、子どもたちの資質・能力を育んでいくことが求められていると考えられる。

2. 学校の現状と課題

A小学校は、総合的な学習の時間・生活科の研究校であり、全ての教科において活発に発言することができる子どもが多い。また、友達や教師と協働的に問題解決する力が身に付いている。体育の授業に関しても、積極的に取り組む子どもたちの姿がみられる。しかし、他教科に比べてめあてをもち、自分の考えを持って課題解決に取り組んでいくという学習場面が少ない印象を受けている。

3. 研究の目的

本研究では、子どもが自ら適切な学習のめあてを設定し、課題を解決するための手立てを考える。そして、その手立てを活用して、子どもたちが繰り返し練習していく中で、「できた」「わかった」という喜びや達成感を感じ、子どもたちが運動をすることに自信を持って取り組んでいくことができる体育授業の実現を図ることを研究の目的とする。

4. 研究の方法

今回の実践では、第6学年「走り高跳び」の単元を扱

うこととした。

子どもたちが自ら適切なめあてを設定して、課題を解決に向けた学習をするための手立てとしてフローチャートを作成した。走り高跳びの一連の動き(助走、踏み切り、空中姿勢、着地)を細分化して、それぞれの動きのポイントを分析し、必要である練習方法について検討した。また、作成したフローチャートは、授業実践で掲示物や資料にしたり、学習カードに掲載して子どもたちが必要な時に活用できるようにした。

4. 評価方法

①フローチャートの有効性に関するアンケート

子どもが自ら学習のめあてを設定し、課題を解決するための手立てとして、フローチャートが有効であったかについて、単元終了後に質問紙調査を実施する。

②運動有能感調査と学習カード記述による抽出児の変容

事前に行った運動有能感調査の結果から、上位児、中位児、下位児として、各群から1名ずつ計3名を抽出児として取り上げ、子どもの学習カードの記述分析を行い、授業実践を振り返りながら学習カードの記述内容と運動有能感の変容の関係性について検討する。

5. 結果と考察

フローチャートがめあて設定だけに活用されているのではなく、子どもたちが課題解決を行っていく時の手掛かりや資料的な役割を果たしていたことが明らかになった。

抽出児の運動有能感の変容に関しては、抽出児全員の子どもの運動有能感が向上した。フローチャートを活用した学習を通して、「できた」という成功体験を積み重ねることができたからであると考えられる。

6. 参考文献

文部科学省(2017) 小学校学習指導要領解説 体育編

スポーツ庁(2018) 全国体力・運動能力、運動習慣調査結果